

## 未来の出来事 9

静枝はカリスキ氏の舌が自分の唇の中に侵入してきたのを感じると、ウム、ウグと声を洩らしつつ、自分の舌をカリスキ氏の舌に絡め合うのだ。カリスキ氏も又、静枝の舌の感触を自分の舌で味わっている。この聴診器のような部分の内部は人間の皮膚に驚くべく程、似ている。謂わば驚似(きょうじ)とでも表現できる、今までの日本語にはない形容詞が現出する。なにゆえ、驚似という日本語がなかったかということ、驚くほど似ているものが存在していなかったという事だろう。この聴診器様の機器の内部は、それに接したものと同化するという特性を持っている。それでカリスキ氏が舌を当てている部分はカリスキ氏の舌と同化しているのである。その感触を聴診器様の部分から先に出ている紐状のもので、静枝の唇に当てられている聴診器様の内部に転送されている。つまり静枝はカリスキ氏の舌を味わう事になる。のみならず静枝はVR(バーチャルリアリティ)の感覚でカリスキ氏の舌が自分の唇の中に入って来た感覚を味わうのだ。なんと驚くべき機械ではないか。

次にカリスキ氏は静枝の口に当てたものを彼女の陰部に移動して当てた。自分の聴診器のようなものは口に当てた

ままで。途端に静枝は自分の女性器がカリスキ氏の舌で舐められているのを感じて、

「ああっ、そんなところを……。カリスキさん、でも、気持ちいい。」

と声を洩らした。

驚くべき事だがカリスキ氏の口に当てている聴診器様の内部は静枝の女性器の皮膚感覚へと変質している。それによってカリスキ氏も直接、静枝のオマンコを舐めている感覚を覚え、自分の股間の屹立したものを益々、硬くしてしまう。遂にカリスキ氏は、

「もう、たまらん!堪えきれない。いくぞー。」

と叫ぶと、自分の口に当てている聴診器様のものを自分の股間に当てた。両手が塞がっているのでカリスキ氏は流太郎に、

「時さん、僕のズボンのファスナーを降ろしてくれ。」

と懇望した。流太郎は急いでカリスキ氏のズボンのチャックを下に降ろす。カリスキ氏は、

「パンツから僕のモノを抜き出してくれよ。」

と再び、懇望するから流太郎は素早くカリスキ氏の棍棒のような物を懇望されるがままに、パンツの外へ出す。カリスキ氏の太いカリスキ氏の棍棒の先端、つまり亀頭部分に氏は聴

診器様の内部に当てた。静枝は、

「ああんっ、入ってきてるわっ、カリスキさんの太いものがっ。」

と頭をのけ反らせつつ、乱れて叫ぶ。

カリスキ氏は腰を前後に振り出すと、静枝は「ああんっ、ああんっ、いくうー。」

と泣くような声を出す。バーチャルリアリティーとして静枝は自分のオマンコの中にカリスキ氏の極太いモノが出入りしているのを実感した。実際的には二人の間は五十センチは離れているだろう。勿論、二人の性器は直接結合しているのではない。聴診器様の内部は空洞であるが、その部分がカリスキ氏に接している部分が静枝のオマンコに、静枝がオマンコに当てられている聴診器様の内部はカリスキ氏の龟头や肉の竿に変質している。これが竜宮王国が緑星に提供した機器の最先端な性科学用品らしい。竜宮王国の機器は、もっと、これより先を行くものではあろう。が閑話休題(それは、さておき)カリスキ氏と白花静枝は本当に性交しているように顔を上気させ、二人共、尻を振っている。二人の目は虚ろになり、静枝は赤い彼女の舌を唇から出した。その時、カリスキ氏は、

「もう、限界だ。玄界灘にいなくても、限界・・・でるう

っ。」

と叫ぶと、聴診器様の内部にドクッ、ドピュウウツと白い精液を大量に射精した。静枝は長い黒髪のを、後ろに反らせるだけ反らすと、「はあうんっ、いいいわあっ。」

とカリスキ氏の射精を本当に受け止めたかのように感じていた。現実にとえば、カリスキ氏の精液が聴診器様の内部から紐を通して静枝のオマンコに当てられた聴診器様の内部に転送される事はなく、ただ、その液体の感覚を静枝のマンコに伝えるだけでは、あるのだが。この辺も、その機器の地球から見れば最先端と思えるもので、液体が身体にかかる感覚を再現させるという、すぐれた代物だ。軽い電子ビームのようなものが聴診器様の内部に出てくる。それが射精された感覚と同じものとなるのだから、驚きだろう。

更に驚きなのは、こういう思わぬ射精の場面を想定されて作られているのか、カリスキ氏の射精された精液は除湿機能で綺麗に消えていた。それにより聴診器様の内部をティッシュで清掃する必要は微塵もないという便利さだ。カリスキ氏は、まだ快感の余韻に浸っている静枝に自分の聴診器様の内部を見せて、

「大丈夫、安心していい。僕の精液は君のオマンコの中に

放出されてはいないから。」

と解説した。静枝は閉じていた両眼を開けると、

「なんだ、バーチャルリアリティーだったんですね。でも本当にセックスしているみたいだったわ。カリスキさんって、とってもテクニシャン。腰の降り方がうまいんですもの。わたし、何回も星の彼方にイキました。」

と告白した。カリスキ氏もパンツを自分のモノにかぶせて、静枝にショーツの端から滑り込ませて当てていた聴診器様のものを取り出すと、

「僕も何度もイキそうなのを堪(こらえ)えたよ。本当に君のオマンコに入れている気分だった。」

と打ち明けると、後ろを向き、流太郎と靱山田を散見した。靱山田の顔は半ば呆然、半ばは驚きの表情だった。流太郎の顔は唾然としていた。靱山田は、

「挿入せずに白花君を絶頂に導いたのには驚いたよ。実は私の女房とは私は、夜の営みが随分と御無沙汰なんだ。カリスキさん、よかったら私の女房とも、してくれないか?その聴診器のようなもので。」

と流太郎には驚きの提案をした。カリスキ氏は聴診器様のものをズボンのポケットにしまうと、

「福丘市の職員として、それは出来ない相談です。でも、

困っている市民を助けるのも我々の役目。奥さんを抱けるのなら、いただきます。」

と眉毛一つ動かさずに返答した。粂山田は満足げに、

「それは、よかった。私も自分の女房が自分以外の男に抱かれるのを見たかったんだ。それではね、女房の居る部屋に案内する。」

と話すと、長い廊下を歩きだす。方向としては、牧場へ向かう向きとは正反対の向きに。一番奥の部屋のドアを粂山田が開けると、三人は粂山田を先頭に中へ入る。高級ホテルのスイートルームのような部屋だった。窓際のデスクに一人の女性がパソコンに向かっていたが、粂山田達が入ってくると顔を三人に向けて、

「あら、いらっしゃい。あなた、この方たちは?御客さんなの?」

と人妻に見えない初々しさのある美人顔で問いかける。粂山は、

「ああ、そうさ。それもね、おまえには、いい人になりそうなんだよ。」

睫毛の長い粂山の妻は、その睫毛をパチパチと動かすと立ち上がり、

「こんにちわ。ようこそ、おこの島牧場へ。」

と両手を自分の股間に当てて挨拶した。真っ白な肌で両方の瞳は緑色、紛れもない緑本人だ。西洋梨のように下半身が、ふくらんでいるが彼女の首筋は細く、髪の毛は茶色だ。靱山田は妻に歩み寄ると、

「紹介するよ。私の妻で、美秋子(びあきこ)という名前だ。旧姓は春野田(はるのだ)だけど、それは、どうでもいい事だったかな。美秋子、あちらの紳士の右側がカリスキさんだ。」

カリスキ氏は右手で自分の前髪を撫でつけると、

「初めまして、奥さん。カリスキです。」

と自己紹介する。カリスキ氏は、こっそりと口の中で生唾を飲み込んだ。超絶的な美人だ!まるで冷凍睡眠から目覚めたような靱山田の妻、若妻の美秋子。人妻には見えないから倫理的な問題意識もない。中年の靱山田に対して妻の美秋子は二十代半ばか前半に見える。美秋子の服装は上下とも白で、下着も恐らく白色だろう。美秋子はカリスキ氏に微笑むと、

「初めまして。カリスキさん。ここは私の私室でダブルベッドも、あそこにありますわ。」

と部屋の隅を美秋子は白い指で示した。そこには白のベッドカバーが掛けられた柔らかそうなダブルベッドがある。

カリスキ氏は咄嗟に(あのベッドで、この美人を抱ける。)  
と思うと、又、口中に湧いた生唾を飲み込む。

流太郎は別の視点から春野田美秋子を見ていた。靱山田が地球では株式会社夢春の社長の靱山に、そっくりなのと、その妻の美秋子は地球の靱山の妻の美秋に梨二つなほど似ている。西洋梨のような、その姿態もだ。地球の靱山の妻の旧姓は確か、春野だっただろう。こういうのをパラレルワールドと、いえそうだ。美秋子は流太郎を見ると、

「あら、仕事の方は、いいの?時田君。」

と問いかけた。流太郎は、

「は?私は、こちらで仕事は、していませんが。」

「あら、ごめんなさい。うちの従業員の時田に、貴方がそっくりなものですから、ねえ、松助さん。」

と自分の旦那の方を顧みる。靱山田松助は、

「時田は牧場で働いているよ。この人は時さんといって、地球から来たんだ。」

「あら、そうだったの。そういえば目も黒ね。いえ、時田の目も黒いんです。地球からじゃ、なかったわよね?時田は。」

靱山田松助は、それに答えて、

「地球じゃなかったよ、時田は。それよりカリスキさんと

セックスしたくないか?美秋子。」

美秋子は恥ずかし気に、

「いやーね、あなた。時さんも、いるし、ね?時さん。」

と言いつつ流太郎を見る。流太郎は、

「それは構いません。奥さんさえ、よろしければ僕は、ここで見させてもらいます。」

旦那の松助は、

「美秋子。時さんも、ああいっているんだ。おまえとは二年も、してないし、すまないと思っている。」

美秋は照れて、

「うふ、そんな事、ここで言わなくても。でも、あなたの前で、わたし他の男の人に抱かれていいの?」

カリスキ氏は、

「奥さん、素肌と素肌を密着させる事を考えると問題意識もあるでしょう。けどね、あなたと私が指先さえ触れることなくセックスをするというのはバーチャルですが可能ですよ。」

と申し出た。美秋子は納得しない顔で、

「バーチャルに?仮想現実って事?空想の世界に耽るとか、そういう事ね。二人で裸になってベッドに座り、おたがいの性器を見ながら・・・というような事かしら。」

「いえー、そんな全裸になるなんて、そこまでしなくても、いいんです。奥さんは下着まででも十分です。」

「下着をつけたままでセックスできるの？」

「それは仮想現実ですから。」

カリスキ氏は美秋子に歩み寄ると、ズボンのポケットから聴診器様のものを取り出した。美秋子は、それを見ると、

「いやーだ、お医者さんごっこね、それを使って。」

「いえいえ、これを、こうやって。」

カリスキ氏は聴診器の片方を美秋子の唇に、片方を自分の唇に当てた。途端に美秋子はカリスキ氏にキスされた気分になる。カリスキ氏が唇を聴診器様のものから離すと、美秋子はカリスキ氏の唇が自分の唇から離れるのを感じた。

彼女は残念そうに、

「もうキスをやめるのね。つまらないわ。」

カリスキ氏は、しかし、

「奥さん、僕は、どうも駄目みたいです。」

と乗り気ではない様子だ。きょとんとした靄山田夫妻にカリスキ氏は続けて、

「さっきね、受付嬢の人と・・・。」

美秋子は、

「白花さんね、彼女と・・・？」

「この機械でセックスしてしまっ。それで、もう出すものがないみたいで。そうなる。と男が立たない、というやつでして。」

美秋子はハハハ、と笑い、

「なるほどね、白花さんにだと全部、出してしまっても可笑しくないわ。でも、わたしの体は火照って、しょうがないわ。松助さん、だめなの?今は?」

旦那の松助は、

「今も無理みたいだよ。時さん、君、どう?僕の家内の美秋子と、するのは?」

と打ち水を振るように問いかけてくる。流太郎は美秋子が、あまりにも地球の靄山の妻、美秋に似ているので抵抗はある。それで答えられないでいると、美秋子は流太郎に近づいて彼の股間を右手で触った。まだ流太郎のそれは充血していなかったが、美秋子の柔らかい白い指先が自分の睾丸と陰茎を握るように動かさないで、ついに激しい血流が流太郎の股間に集結した。美秋子は自分の手の中で大きくなった流太郎の息子に、

「すごいわ。若いのね。主人のより硬くて大きいわ。時さん、わたしと、しましょ。」

カリスキ氏は聴診器様のものを流太郎に渡した。それを受

け取った流太郎は、

「これなら奥さん、問題ないですよ。」と云うと、  
聴診器を自分の口に、もう一つのそれを美秋子の唇に当てた。二人は即座にキスし合っている感覚を覚える。流太郎は、(なんて柔らかで気持ちいいんだ、奥さんの唇は)と感じ、美秋子も、(男らしい唇ね・・ウツトリするわ)と眼を細める。粂山田松助は妻の美秋子が従業員の時田とキスしているような気分になる。二人のバーチャルキスは二十分を超えた。流太郎のズボンの股間は今や、破れんばかりの勢いになっている。カリスキ氏は二人の傍から、

「時さん、もう、そろそろ奥さんとベッドへ行って。」  
と指導する。

流太郎は一旦、聴診器様のものから自分の口を外し、美秋子を見た。美秋子も唇を聴診器様のものから外すと流太郎の右手を左手で握り、ダブルベッドへと連れて行く。

美秋子はベッドのそばで流太郎の手を離すと、彼に向き合い、服を脱いでいった。流太郎も美秋子と向き合った。白い上着の下は何と黒の下着を美秋子は身に着けていた。彼女はブラジャーを抱きかかえるように両手で握る。すると! 黒色だったブラジャーは透明になったのだ。美秋子が両手をブラジャーから離すと、そこには豊満な果実のような彼

女の乳房がハッキリと見えていた。なにせ透明なブラジャーだ。ツンと尖った美秋子の赤い乳首も見える。美秋子は次に、股間のショーツに陰部を隠すように両手を当てる。そして両手を外すと、その股間のショーツも透明となっていた。黒々とした美秋子の陰毛は、かなり多い。流太郎は美秋子の透明な下着姿を上から順番に見ている。もはや全裸に等しい美秋子だった。彼女は、

「タッチすると透明になる下着なのよ。地球には、こんなものは、ないでしょ？」

「ええ、ないです。こういった方面に地球の科学は進歩しません、ようです。」

「そうでしょ。それで男は性欲を失いがちかな、主人にも見せたくて。ね、あなた、どうだった？」

と松助を振り返る美秋。松助は、

「よかったよ。少し息子がびくっとしたかな。」

「よかった。今晚、あなたの前で見せてあげる。聴診器みたいなものでバーチャルセックスなんて、わたしには好まれないものね。それよりリアルに近いセックスがしたいの。」

美秋子はベッドわきのタンスから何かを取り出した。それはクマのぬいぐるみだった。それも分厚いぬいぐるみで、

美秋子は、それを流太郎に手渡し、

「服を着たままで、このぬいぐるみを着て、わたしとベッドでセックスしましょ。」

と微笑む。それを身に着けた流太郎は顔は、ぬいぐるみの目だけが空洞になっているから外も見えるが、肝心の男根の部分も厚いぬいぐるみで覆われている。さっきまで元気に隆起していたものも、今は萎びてしまった。それで、

「奥さん、もう全然、立っていませんよ。これでは何にも、なりません。」

「そーお?じゃあ、わたしが、こうすれば?」

美秋子はダブルベッドに仰向けに寝そべると、流太郎に向かって膝を立てて大きく美脚を広げた。彼女の陰部も口を開いた。透明下着なので、それは流太郎にも見えるが自分がクマになったようで、一向に息子は立たない。美秋はベッドに起き直ると、ベッドわきのテーブルからリモコンのような物を取り出す。それを彼女は指で操作した。と、どういう事だろう。

流太郎の脳内に強い電流のような物が走り抜けた。流太郎は、ものを云おうと思ったが、言語は全て忘れていた。とにかく何か叫びたい。ウォーッ、ウォーッと彼は叫んでいた。

近くにいるカリスキ氏と靱山田は呆気にとられた表情で、夫人の美秋子は透明の下着姿でベッドに座って笑っている。彼は自分の脳内がクマになったと感じた。それは、ぬいぐるみの頭部の内部に、まず電流が走ったような感覚があり、それから言語を失ったような感覚と人間の理性を亡くしたような気持ちになった。目の前にいるのは透明の下着を身に着けた美人妻だ。クマとしての自分には何の興味もなかった。さっきまで自分は、この美人妻の裸体に近いものを見て下半身の陰茎をあらんばかりに立てていたのだが。

クマ、クマ、クマだ、こんな場所には仲間のクマは、いるはずがない。この外に出よう。きっとクマが、いるはずだ。できればメスのクマに巡り合いたい。クマになった流太郎は施設の玄関に駆け出す。クマになったといっても、ぬいぐるみの中の肉体は人間のままだ。

施設の玄関に飾ってある高価そうな大きな焼き物の壺を流太郎は右手にとると、それはカップラーメンのお湯を入れていない状態の重さに感じられた。ウオーッイッ!流太郎は奇怪な叫びをあげると、玄関ドアに、その焼き物の壺を投げつけた。ガシャン!と大音響をあげて壺は細かく割れて落ちた。ドアノブをぬいぐるみのクマの手で開けると流太郎は牧場へ出た。牛、牛、牛の群れが見える。クマなん

て何処にも、いないじゃないか。当たり前だ。牧場にクマを飼っている奴など、どの世界にいるんだ。少し先の柵の向こうに森が見える。あの森の中にはクマが、いるかもしれない。クマの流太郎は二本足で走った。ぬいぐるみではないと遠くから見て、そのクマの走り方を見た人は驚いただろう。クマの流太郎は柵を跨ぎ越え、昼なお薄暗い森へと走り入った。

森の中に一匹のメスのクマがいた。人間の流太郎なら恐怖を覚えるだろう。しかし、今の流太郎の意識はオスのクマなのだ。人間の意識は失っている。そのメスクマは縫いぐるみの流太郎を見ると、オスのクマと見たらしく、自分の前足を木の幹に掛けて尻を高く突き出した。メスクマは性器を見せている。流太郎は勃起した。すると、それに連動して縫いぐるみの性器を覆っている部分も拡張、拡大したのだ。それでクマの、ぬいぐるみのそれも立身した。そうだ、立身挿入だ!流太郎はメスクマに、のしかかると縫いぐるみで覆われた自分の挿入の道具をメスクマの生殖器に突入させた。獣姦という意識は流太郎には、なかった。メスクマも縫いぐるみのクマとは思っていないようだ。二匹は大木を揺らすほど腰を振った。クマの意識になった流太郎は射精への緊張が人間の時より早い事など、比較する

記憶もなく、おっ、という間に射精してしまった。

施設内では牧場主の靦山田の妻、美秋子が自分の透明になった下着を再び両手で軽く触れると、透明な水着は白色になり、彼女の股間を覆うショーツも彼女の黒き陰毛は反映しなくなった。乳首も同様に見えなくなる。美秋子は手にしたりモコンを操作して、ニヤリと笑みをこぼした。靦山田は、

「何をしたんだ、美秋子。」と聞く。

「クマのぬいぐるみを着た時さんの意識を人間に戻したわ。さあ、外に出ていった時さん、どうなるのかしら？」

メスクマの前に立っている時流太郎は、意識がクマから人間へと戻った。その途端に目の前に尻を出しているメスクマの姿に恐怖を覚えた。(クマ、だ。こわい。さっきまでは怖くは、なかったのに。)

ただ、メスのクマは気持ちよさそうで、流太郎に襲い掛かってくる気配もない。彼は、そーっと後ろを向くと、ゆっくりと歩き出した。森は、すぐに出た。施設へ帰ろう。牛は流太郎を気にしてもいない。おそらく、この牛はクマに襲われた事など一度も、ないのだろう。

